様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １５ 日現在

機関番号：３５４０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２２８９

研究課題名（和文）近世宮廷絵師の画系、出自的背景と宮廷社会に関する基礎研究

研究課題名（英文）Fundamental research about the lineage of the Imperial court painters and the court society

研究代表者
福田　道宏（FUKUDA, Michihiro）

広島女学院大学・人間生活学部・准教授

研究者番号：１０４６９２０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：宮廷御用を勤める絵師たちの総体を「画壇」と捉え、構成する宮廷絵師の営みを通時的、かつ巨視的に俯瞰するこれまでの研究を発展的に継承し、彼らの画系、出自的背景とともに、宮廷社会とのかかわり方を解明する基礎研究である。文献史料に依拠した研究を行い、また、現在、失われつつあり、危機的状況にある絵師の墓所などを実地調査した。
結果、これまで美術史研究では全く知られていなかった絵師の名や動向、参加した具体的な御用が見つかったほか、よく知られた絵師の知られざる動向や御用の内容も垣間見ることが出来た。検討が充分でないものや未整理のものもあるが、こうした情報をもとに近世宮廷画壇を通史として構築する準備が出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の特徴は、美術史研究の感覚的評価ではなく、同時代的な位置づけが見えてくること、作品の現存しない絵師も同時代に位置づけることができることにある。さらに画系的、出自的背景の解明により宮廷絵師を正当に評価することが可能となる。
本研究では公卿家・地下官人家などに伝来した記録類を渉猟し、そこから宮廷絵師の御用や動向を示す記事を拾い、編年化することで通時的な宮廷画壇史を構築することを目指したが、作品が現存しないために研究の緒にもつけなかった絵師や作品のみ残って事績が明らかでなかった絵師について多くの情報を収集することが出来た。これらの情報を還元することで、近世絵画史はより豊かなものになるはずである。

研究成果の概要（英文）：The whole group of painters who work for the Imperial court is regarded as the Courtier painters, this research is a fundamental research of the lineage of them and the court society chronologically and macroscopically. Along with the background, this is a basic research to elucidate the relationship with the court society. This research conducted research based on historical documents, and also conducted a field survey of the graves of painters, who are now at a loss and are in a critical situation.
As a result, in addition to discovering the names and works of Imperial Court painters who had never been known in art history research, and the specific uses that they participated in, it was possible to get a glimpse of unknown works and contents of that were well known. It was ready to build a history of the Imperial Court painters in early modern age.

研究分野：美術史

キーワード：美術史　日本史　絵師　宮廷　地下官人　墓碑　古記録　画壇

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は平成 24 年度から 26 年度の「十八、十九世紀、宮廷御用絵師の通時的画壇史としての研究」（科研費若手 B）をより深化させる基礎研究として企図したものである。従来の美術史研究では、宮廷画壇史という視角がほぼ欠如していた。その理由としては、
1)「御用絵師」という概念が明確に定義されないまま独り歩きし、そのため宮廷周辺の絵師たちが正当に近世絵画史に位置づけられてこなかったこと
2)作品が現存しない絵師は、作品研究が主で、文献史料研究が従である美術史において、評価し得ないこと
3)絵師も個性の表出をもって評価され、没個性的になりがちな御用絵、つまり、公的事業で制作された作品の評価が低いこと
の 3 点が挙げられる。なお、「宮廷画壇史」という術語は宮島新一『宮廷画壇史の研究』（1996 年、至文堂）が使うが、語の定義からして本研究とは隔たりがある。本研究の開始時点までに、美術史研究においても史料に依拠した、或いは史料を積極的に用いた研究も増えている。『近世御用絵師の史的研究』（武田庸二郎ほか編、福田の「紀伊藩御絵師笹川遊泉の由緒について―寛政度内裏造営御用の拝命と紀伊藩登用をめぐって―」、「解題『禁裏御所御用日記』について」、「翻刻　禁裏御所御用日記抄」を収載）や、脇坂淳『京狩野の研究』（2010 年、中央公論美術出版）、五十嵐公一『京狩野三代生き残りの物語』（2012 年、吉川弘文館）などの研究成果が出始めており、本研究もこうした研究と問題意識を一部共有している。ただし、多くの場合、個別の事例を文献史料の面から検討はしても、通時的に捉えようというものではない。従来の美術史研究の弱点でもあるこうした点を克服すべく、まずは文献史料に基づき、宮廷画壇の具体相を明らかにすることを目指した。また、現在、全国各地の寺院が消滅の危機にあると盛んに言われているが、京都市中の場合、寺院の存続そのものよりも無縁墓の整理が進行しており、絵師の墓所も例外ではない。かつて調査した絵師の墓のいくつかもすでに失われてしまっており、出自的背景の検討に不可欠な絵師の墓所の調査は喫緊の課題である。

しかし、前研究課題「十八、十九世紀、宮廷御用絵師の通時的画壇史としての研究」の遂行を通じて、調査するほどに新たな文献史料を見出すに至った。その量が膨大なため、未着手の年代も少なからず残ってしまった。また、多人数の絵師が登場するが、総体として画壇を通時的に巨視的に俯瞰することを目指すため絵師一人一人に深入りせずに顔ぶれの把握に努めたため、突如として御用に登場する御用絵師たちが、そもそも、どのような画系（師承の系譜）に位置づけられるのか、どのように採用されたか、そして出自的にどのような背景を持った絵師なのかが不明な場合も多かった。

宮廷御用への採用には、画系や画技以上に、身元が確かであること、つまり出自的な背景が重視されており、宮廷社会との結びつきが大きな意味を持つことが分かっている。そのため、自身が官人になるなどの生き残り戦略がとられ、幕末の宮廷御用をみると、時代が下るほど官位を有する、つまり地下官人である絵師の割合が高まるという傾向が顕著である。ただし、それが、原在明や岸駒の子孫のようにもともと絵を生業としていて、地下官人家を養子などの形で相続したものなのか、もともと官人だったが絵も描いたのかなど不明な点が多かった。そもそも宮廷御用を勤め、地下官人でもあるような宮廷絵師については、ほとんど研究もされておらず出自的背景は未開拓の領域であった。さらには、これまで円山応挙に始まる円山家のように絵師としての実力が評価されていたと理解され、直接的に宮廷社会に自らが構成員として参加することで御用を獲得したのではないと考えられてきた絵師についても、公卿や門跡などから扶持を得たり、家司と見なされ宮廷社会と深く結びついていたりすることが、維新後の旧官人の名簿から断片的に判明しつつある。こうした知見を踏まえ、本研究では、未着手の年代を埋める作業を続行し、近世宮廷画壇の全貌を通時的・俯瞰的に明らかにするとともに、そこに現われる個々の絵師たちについても、特に画系や出自的背景、宮廷社会とのかかわりといった点から調査し、その構造を明らかにすることを目ざした。

２．研究の目的

本研究は、応募者がこれまで行ってきた、宮廷御用を勤める絵師たちの総体を「画壇」として捉え、それを構成 する宮廷絵師の営みを通時的、かつ巨視的に俯瞰する研究を発展的に継承し、彼ら宮廷絵師たちの画系、出自的 背景とともに、宮廷社会とのかかわり方を解明する基礎研究である。今回も文献史料に依拠した研究を行う。加 えて絵師の墓所を実地調査する。各地の寺院が消滅の危機にあると盛んに言われているが、京都市中の場合、寺 院そのものの存続よりも無縁墓の整理が進行しており、絵師の墓所も例外ではない。絵師の出自的背景の検討に 不可欠な墓所の調査は喫緊の課題である。これまでの研究の感覚的評価では なく、同時代的な絵師の位置づけが見えてくるとともに、作品の現存しない絵師も同時代に位置づけることができる。さらに画系的、出自的背景の解明により宮廷絵師という生業を正当に評価することが可能となる。

３．研究の方法

研究方法として、申請時には、

1)公卿・地下官人・非蔵人文書から絵師の記事を渉猟し、通時的に拾って、宮廷御用絵師の御用を編年化
2)上記１の御用を絵師の側の記録から校合、検証
3)実作品との対照と調査
4)墓所の実地調査
を挙げた。
美術館・博物館での展覧会や社寺での実物公開にせよ、図録など印刷媒体での公開にせよ、「世に出る」作品は現在、有名な絵師による作品が大多数であり、逸名の作品、逸伝の絵師の作品はほとんど目にする機会がない。そこで、有名無名の絵師たちが、いつ、何の御用で、どのような画題で、どのような材質の、どのような形状の作品を描いたかを押さえることが重要になってくる。
　本研究では、前研究課題での成果を踏まえ、宮廷関係の文献史料を渉猟し、そこに見られる絵師の御用を編年化し、年表に落としていく作業を続行した。また、そこで作られた御用絵の筆者・画題・材質・形状・員数・制作年と何の御用だったのか文献に現われる作品の一覧化を行った。研究開始時点で、かなり緻密に絵師の動向と絵師の御用を拾い得た年代と、散発的にしかわかっていない年代、未着手の年代があり、粗密の差があった。これは、もちろん、文献史料の記録精度に記録者によるばらつきがあること、文献史料の現存数の問題でもあるが、検討する文献史料の範囲を広げることで、より通時的な検証を行うこととした。

４．研究成果

（１）研究期間全体を通じての成果の概要

　宮廷関連の文献史料の検討に関していえば、前研究課題ですでに複写済みの古記録とそのデジタルデータ、研究者自身が翻刻したものなどを突き合わせて整理するなどしたうえで、新たな文献史料も検討対象としたが、結論から言えば、まだ充分に検討できていないものもある。通覧して、宮廷絵師の事績を拾ったものの、全翻刻するには膨大過ぎるため、部分翻刻にとどまっており、再精査すれば遺漏も見つかる可能性はある。ただし、それでも一定以上の成果は上げ得た。調査を行った具体的な史料と、そこから得られた具体的な成果については次項以下に記すが、17 世紀末から明治維新前後までの 170 年間のあいだの大小さまざまな絵師の御用や、絵師の動向を拾うことは出来たが、出自的背景に関しては養子を養子と明記せず、実施と記すことが多い古記録の性質上、未解明な点も多い。上記の研究方法で２に挙げた、絵師の側からの記録は、前研究課題までにすでにかなり検討を進めた京都府立京都学・歴彩館所蔵の「原家文書」や、個人蔵の「山口八九子家文書」などを除けば、まとまったもの量と質のものはやはり少ない。宮廷絵師そのものではないが、宮廷絵師鶴沢家と師承関係にある、地方の大名家御絵師の史料など若干を見出すことが出来たが、今回の研究テーマからはやや外れるため、宮廷絵師の地方展開という次の課題での検討に譲ることとした。
　また、本研究の眼目であった墓碑など金石文御調査だが、近代以降の掃苔録や近世墓に関する先行研究、個別の絵師の研究なども参照したが、現存が判明する宮廷絵師の墓はいまだほんのわずかであり、菩提寺があきらかな数名に関して、当該寺院に墓や過去帳などの調査依頼をしても断られるケースもあった。個人情報の保護という観点からは致し方のない面もあるが、研究内容を適確に伝えるとともに、こうした研究を一般に認知してもらうためのより一層の努力が必要である。研究者自身がかつて調査した墓や、先行研究が写真入りで紹介する墓も、本研究で再訪し、拓本を採ったり、本研究のために導入した３Ｄスキャナで実地調査するなどしたが、一方で墓地の整理が行われて、この 10 年程で失われたものもあった。近世墓の危機的状況を実感せざるを得ない。
　宮廷御用で制作された実作品に関しても、上記研究方法で述べたとおり、実物であれ、印刷物を通じてであれ、公開されることが少なく、特定できる現存作品は多くないが、一方で宮廷御用かどうかは不明ながら、宮廷絵師の作品であることが確かなものがインターネット上のオークションサイトなどでまれに散見されることがわかった。今後、研究の進展で無名の絵師に光が当てられれば、世に現われる作品も増える可能性はある。
　なお、次項以下でふれるいくつかの未公表の成果に関して、論文を執筆中、もしくは準備中である。全翻刻や部分翻刻した文献史料については、再度校訂したうえで解題を付して出版か公表をしたいと考えているが、実現には至っていない。宮廷絵師の御用を通時的に整理した年表は現在、情報を更新して整理中だが、今後、インターネット上での公開も視野に入れて、無料の Google サイトで研究者自身のホームページの作成に着手したが、どのような形での公開が使い勝手が良く、適切か検討が不充分なため公開には至っていない。

（２）調査した主な文献史料

　相当数の文献史料を所蔵機関での閲覧などで調査したが、宮廷絵師の御用を含む動向が現われるものに出会う確率はかなり低い。ただ、ほんのわずかな情報からも得られる知見は貴重であり、調査した文献史料のうち宮廷絵師に関する情報を見出し得たものを中心に主なものを挙げる。
　公卿家・地下官人家などの伝来史料では京都府立京都学・歴彩館所蔵の「下橋家資料」・「平田

家文書」・「土山家文書」などの現地調査を行った。また、近年、近世史料に関してもインターネット上での公開が進んでおり、京都大学附属図書館所蔵の「平松文庫」や、以前から継続して検討を行っている国立国会図書館所蔵の「禁裏御所御用日記」などの一部も本研究の期間中にインターネット上で閲覧検討するなどした。またやはり、前研究課題から継続して検討を続けている国立公文書館所蔵の押小路大外記家の日記類について、入手済みの複写物などをもとに検討を行った。

宮廷絵師の家に伝来の史料では、複写が未入手だった京都府立京都学・歴彩館所蔵の「原家文書」・「原在泉家文書」について閲覧して検討・再検討した。

それ以外では、公刊されている『京都町触集成』にも納められた京都府立京都学・歴彩館所蔵の「古久保家文書」など近世の京都の町に出された触のなかに絵師に関する情報を含むものがあることが研究期間の後半になって判かり、閲覧・複写などをして検討中だが、上記『京都町触集成』でなぜか漏れている記事もあり、照合しつつ検討を進めている。明治初年の京都府庁文書のなかにも上記、町触と似た記事があり、具体的には後述するが、宮廷絵師の動向や住所などが触によってわかる可能性がある。

文献史料以外では宮廷絵師の作品が出品される展覧会などで作品調査をしたほか、宮廷絵師の作品を含む広島県立美術館所蔵「諸家書画帖」の特別観覧を申し込み、撮影・調査を行うなどした。また、これも後述するが、直接的に宮廷御用ではないものの、宮廷絵師木村了琢の日光輪王寺所蔵作品や、了琢がかかわった蓋然性の高い日光二荒山神社の扉絵の調査なども行った。絵師の墓碑では、京都所在の原家・勝山家・土佐家などの調査を行ったほか、木村了琢家の墓所を探したが、先行研究が紹介する墓碑はすでに失われており、戦後、子孫が建て替えた墓碑のみが残っていることがわかった。一部は拓本や３Ｄスキャナによる記録も採った。なお、島根県立美術館の展覧会で同地出身の絵師堀江友聲が一時期、宮廷絵師海北家の養子となっていたことを知り、安来市にある堀江家の墓所を調査した。また、作品が現存せず、事績に不明な点が多い、大森捜月は広島御手洗の出身で、宮廷絵師大森捜雲の養子となったが、御手洗に墓があり、その調査も行った。

（３）主な成果

期間中に論文や学会発表で公表できたものは、通時的な情報の収集と出自的背景という研究課題の性質上、多くはないが、個別のテーマとして論じうるものに関しては、いくつかすでに公表した。また、現在、公表準備中のテーマも複数ある。公表・未公表のものも含め、その主なものを以下、列挙し、概要を紹介する。

① 昭憲皇太后の入内にかかわる宮廷絵師の御用

近世最末期、明治維新の前後で入内した、明治天皇の皇后である昭憲皇太后の入内に関する文献史料から、その際、制作された調度・道具類の絵の御用について、宮廷絵師の名と御用の内容を精査したが、その前後の期間における絵師の動向を明らかにするため、幕末期のまとまった日記の精読を行った。具体的には昭憲皇太后の成果である公卿一条家に仕えた下橋家の日記を含む古記録が、京都学・歴彩館所蔵（一部寄託）の「下橋家資料」として残されており、一条家侍の下橋敬長の文久 3・4 年、慶応 4 年の日記を読み、慶応 4 年分に関しては翻刻を完了し、校訂中であり、文久の 2 冊については通読ののち一部翻刻も行なった。

② 平松文庫の御用留などに見える宮廷絵師の事績

公卿平松家の伝来史料が京都大学附属図書館に所蔵されており、うち『御用留』などと題される、同家の家司が書き留めたと思しき古記録に絵師の僧位叙任や、御用拝命の挨拶などの記事が散見されることがわかった。具体的には平松家 6 代目の時章（ときあき、1754～1828）の院伝奏（いんのてんそう）在任中（1800 年～1814 年、1817 年～1820 年）、議奏（ぎそう）在任中（1814 年～1817 年）の記録 5 種 69 冊である。院伝奏は仙洞御所で上皇の奏請をする役職であり、議奏は禁裏御所で天皇に上奏し、天皇からの意向を伝達する側近ともいうべき役職である。上記 20 年間に時章のかかわった業務を平松家家司が記したもので、そこに絵師が登場する。ここには今日ではその名すら風化して、忘れ去られた絵師もふくまれるほか、京都以外の、九州や山陰・山陽地方など地方の絵師が京都の宮廷と結んでいた関係も垣間見える。さらに、時章が最初の院伝奏在任中に、後桜町院の崩御があったため、時章は院の御遺物分配に関わっており、誰にどのような上皇遺愛品が下賜されたかが記録される。そこには、絵師の描いた絵も散見され、貴重である。今日、京都などの寺院で特定の天皇から下賜されたと伝えられる品々には、こうした御遺物も含まれると考えられ、来歴を考えるうえで重要な情報と言える。

③ 日光二荒山神社本社本殿の扉絵と絵所木村了琢歴代の事績、作品

解体修理中の重要文化財日光二荒山神社本社本殿を建築史学・宗教学の面から調査している学術調査団からの依頼を受け、同神社社殿と、宮廷絵師であり、宮廷の絵所をつとめる絵仏師の家木村了琢家のかかわりについて調査するとともに、日光での現地調査、比較作例として京都泉涌寺での現地調査も行った。了琢は天海僧正に推されて日光東照宮造営にかかわり、代々宮廷の絵所として御所内の仏間などの絵を手掛けたほか、幕府の日光での御用にもかか

わったとされる。日光輪王寺には多数の了琢作品が所蔵され、その一部を調査した。結果、画風や画技にはかなりの振幅の幅があることがわかった。代々、襲名するために歴代のどの代にあたるかなど不明な点も多く、検討は充分ではないが、制作年から代の判明するものを基準にして、ある程度推測も可能かもしれず、今後の課題である。ただし、了琢のように、強く伝統を意識した作品を求められる絵師の場合には、摸古作もあり得て、単純な画風の判断は難しいことも明らかになった。なお、既述のとおり了琢の墓碑の調査を行ったが、近世の歴代の墓はすでになかった。複数の菩提寺が先行研究で紹介されるため、代替わりが、実は実子ではなく養子だった可能性もあるので、現在の菩提寺以外でも探したが、了琢の墓碑を見つけることは出来なかった。

④　絵師大森捜月について
現時点で現存作品は見いだせないが、広島県呉市豊町の御手洗の満舟寺に大森捜月の墓がある。亀趺墓として注目されるが、彼はこの御手洗出身で、宮廷絵師大森捜雲の女婿となった絵師である。ただし、早くに故郷に帰って亡くなり、宮廷御用をつとめる遑もなかったものと考えていたが、宮中に所蔵されていた屏風の目録にその名があることがわかった。現存はしないものの宮廷絵師と地方という点で既述の堀江友聲とともに、次の研究課題につながる内容と言える。

⑤　宮廷絵師の御用と２町四方火の用心の触
まだ数度しか確認できていないものの絵師が御用を務めている最中、市中に出される触で、絵師宅の周囲２町四方に大切な御用中だから火の用心を徹底するように、という触が、京都の町衆の家に伝来の触留、および明治初年の京都府庁文書に含まれる記録のなかに見つかった。後者の場合、絵師の住所が書かれており、何の御用かは検討中だが、明治維新時点での絵師の住所が明らかになる点は貴重である。既述のように公刊された『京都町触集成』に漏れている記事もあるため、膨大な史料を通覧しているが、件数が増えれば、ここから絵師の御用がわかるのみならず、明治初年の例のように住所がわかることで、代替わりが家の交替かどうかといった出自的背景も明らかになる可能性がある。

上記の①②④は既発表、③は未発表だが日光二荒山神社の調査報告書に掲載のためほぼ執筆を終えている。⑤についてはもう少し時間をかけて検討が必要だが、検討を終え次第、近いうちに論文にして成果を公表したいと考えている。ほかにも論文のテーマとなりうるいくつかの気づきはあるが、通時的な情報の収集という研究の性質上、論文での公表が適さないものもあり、インターネット上でのデータベースの公開なども視野に入れて、成果の公開方法を検討したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 福田道宏	４．巻 29
２．論文標題 亀が背負い、守り伝える近世絵師の墓―御手洗出身の大森搜月の亀趺墓	５．発行年 2020年
３．雑誌名 グランデひろしま	６．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福田道宏	４．巻 27
２．論文標題 研究発表（要旨）昭憲皇太后入内と慶応末年・明治初年の絵師の御用について―京都府立京都学・歴彩館蔵『寿栄君御方女御御入内仮日記』をもとに―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 近代画説	６．最初と最後の頁 152-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福田道宏	４．巻 23
２．論文標題 森寛斎「阿伏兎観音岬真景」―尊王攘夷の志士たちとも交わった骨太の絵師、円山派の最後を飾る（広島に息づく近世の名品）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 グランデひろしま	６．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福田道宏	４．巻 64
２．論文標題 京都大学附属図書館蔵『御用帳雑記』ほか公卿平松家記録にみえる絵師の顔ぶれ	５．発行年 2017年
３．雑誌名 広島女学院大学論集	６．最初と最後の頁 104(1)～77(28)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 福田道宏	４．巻 15
２．論文標題 広島に息づく近世の名品12物言わぬ馬の絵の物言いたげな視線―早世の天才、原在正の《馬図》	５．発行年 2016年
３．雑誌名 GRANDEひろしま	６．最初と最後の頁 4～5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 福田道宏
２．発表標題 照憲皇太后入内と慶応末年・明治初年の絵師の御用について―京都府立総合資料館蔵『寿栄君御方女御御入内仮日記』をもとに―
３．学会等名 明治美術学会2016年度第4回例会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考